

## 「アダム・スミスは市場万能主義を正当化する自由放任を説いた」は完全な誤解

～以下、「はじめてのアダム・スミス」＜朝日新聞（12.8.27）＞より～

富を生む市場、「フェア」が条件

アダム・スミス・・・・・・は・・・・・・市場経済の守護者のように語られる。・・・・・・「神の」という枕詞に続いてよく使われる「見えざる手」。実はスミスは、この言葉を主著の「国富論」と「道徳感情論」でそれぞれ1回づつしか使っていない。「国富論」で「自己利益の追求」の文脈で使ったため、「自由放任を説いた」などとその後の書で書かれた。好き勝手に競争すれば、神の見えざる手が導いてくれ、すべてうまくいく——。そんな「市場万能主義」を正当化していると思われがちだ。だが、堂目卓生・大阪大教授（経済思想史）は「完全な誤解です」と指摘する。**「正義にかなった経済活動をすれば」という条件をスミスは課していた**という。市場重視のスミスは、当時の重商主義に批判的だった。国内産業を保護して金の蓄積を図るため、国家との癒着や既得権益が維持されやすい。「国が経済を引っ張ることはない。見知らぬ人を結びつける市場が富を生み出し、社会を豊かにすると考えていた」。**「正義にかなう」行為とは、何なのか**。堂目さんは「**フェアプレーの精神です**」と話す。**心の中で、他人の立場から見ても自分の振るまいは道徳的に正しいと思える**。そういう感情だ。スミスは「道徳感情論」でこうした感情のメカニズムを分析、社会をまとめるルールと考えたという。「市場を他人と豊かになれる場所と捉えた哲学者だった」・・・・・・母国英国で今夏、大手金融機関による金利の不正操作が明るみに出た。リーマンショック以降、「身勝手なプレー」ばかりが目立つ金融市場は政府を翻弄し、市民の生活を脅かす存在になった。経済入門書作家の木暮太一さんは「スミスは富を生む市場についてだけではなく、幸福につながる経済とは何かを考えていた」と話す。グローバル時代に「幸福につながる」市場とは、改めて突きつけられている課題に、スミスはどう答えるだろう。（高久潤）